



2022年9月期 第1四半期

決算説明資料

東証グロース 証券コード：4427

株式会社 EduLab

2022年4月4日



当社は、2022年4月1日付にて、特設注意市場銘柄に指定されることとなりました。

株主や投資家の皆様をはじめとする関係者の皆様に、多大なるご迷惑とご心配をおかけしておりますことを深くお詫び申し上げます。

当社は2022年1月25日に「改善報告書」を提出し再発防止策に取り組んでおりますが、今回のさらなる措置を厳粛に受け止め、内部管理体制等を早急に整備し、指定の解除を受けられるよう、役職員一丸となって誠心誠意取り組んでまいります。



1. 第1四半期決算概況	3
2. 2021年9月期第1四半期実績	4
3. 事業セグメント別 実績	9
4. 2022年9月期通期見通し	17
5. 成長戦略	19

1. 2022年9月期1Q決算概況

- 売上高 2,080百万円（前年同期比 11.3%増）
- 営業利益 △214百万円（前年同期は△396百万円）
- 経常利益 △243百万円（前年同期は△364百万円）
- 親会社株主に帰属する四半期純利益△881百万円（前年同期は△346百万円）
 - EPS △87.98円
- 教育プラットフォーム事業、テストセンター事業、テスト運営・受託事業が牽引し、前年比11.3%の増収
- ソフトウェア開発投資に伴う減価償却費の減少等により、前年同期比で損失幅は縮小したものの、前年同期に続き営業損失を計上。また、テストセンター事業、AI事業及びテスト運営・受託事業における減損損失、投資有価証券評価損、特別調査費用引当金繰入額の発生により、親会社株主に帰属する四半期純損失が前年同期比で拡大

2. 2022年9月期1Qのセグメント動向

- テスト等ライセンス事業は、ライセンス収入の減少や、商流変更に伴う売上減少等により減収（1.6%減）
- 教育プラットフォーム事業は、スタディギアのライセンス収入等が増加し増収（10.9%増）
一方で、利益率の高い辞書等のコンテンツ利用料が減少し減益（45.3%減）
- テストセンター事業は、テストセンター利用者数の増加に伴い業績は順調に推移し増収（11.9%増）
- AI事業は、「DEEP READ」ライセンス収入は安定して推移したものの、親密先とのPOC契約の減少等により減収（33.8%減）
- テスト運営・受託事業は、大阪府の令和3年度中学生チャレンジテストの受注等により増収（36.7%増）
一方で、既存案件の採算性の悪化と、利益率の低い案件の受注により、セグメント損失幅が拡大



2022年9月期 第1四半期実績

損益計算書

(単位：百万円)

	21年9月期 1Q	22年9月期 1Q	対前年同期比
売上高	1,869	2,080	+ 11.3 %
EBITDA	△ 162	△ 40	-
EBITDA率	-	-	-
営業利益	△ 396	△ 214	-
営業利益率	-	-	-
経常利益	△ 364	△ 243	-
親会社株主に帰属する 四半期純利益	△ 346	△ 881	-

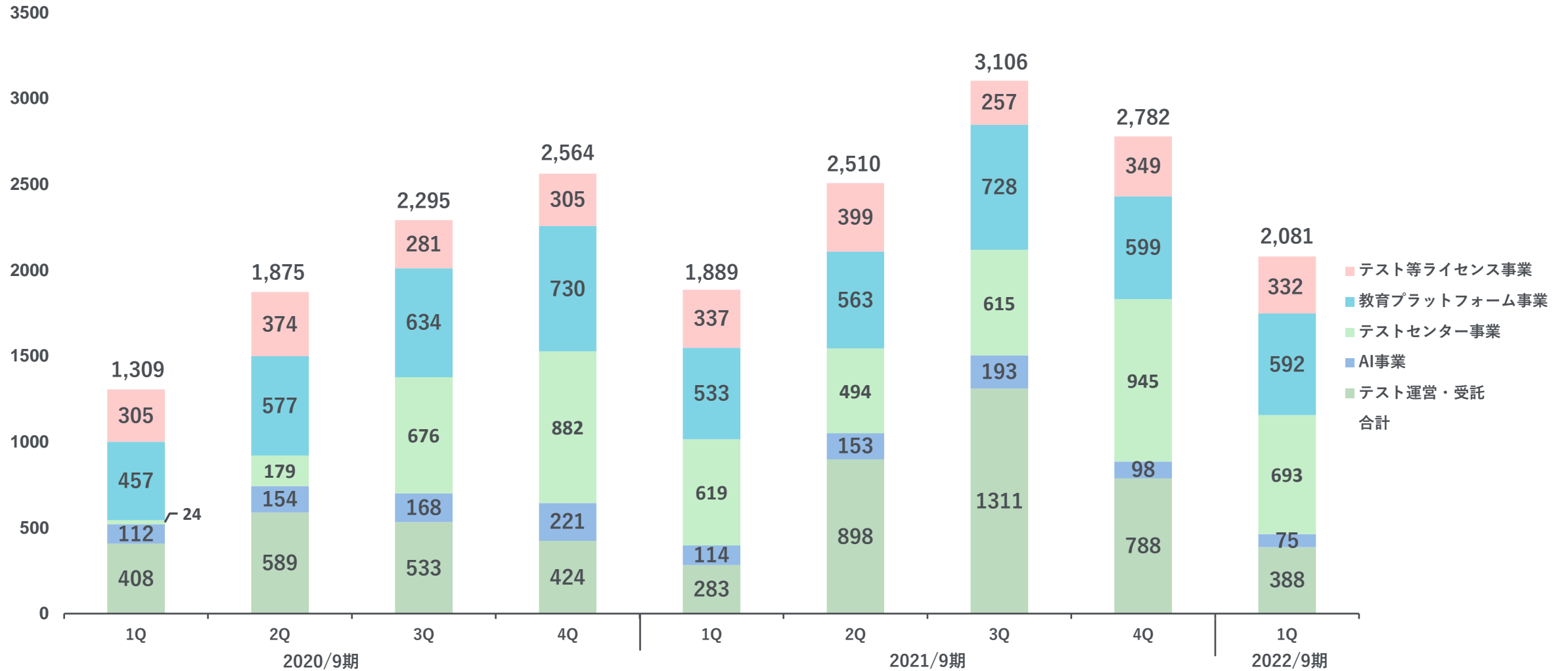
- テスト等ライセンス事業、AI事業で売上が減少した一方で、教育プラットフォーム事業、テストセンター事業、テスト運営・受託事業で売上が順調に拡大し、**売上高は対前年同期比 11.3%増**となる**20.8億円**を達成
- ソフトウェア開発投資に伴う減価償却費の減少等により前年同期比で損失幅は縮小したものの**214百万円の営業損失、243百万円の経常損失**を計上
- 特別損失が発生したことにより、親会社株主に帰属する四半期純損失は前年同期比で拡大し、**881百万円の四半期純損失**となった
 - 一部の固定資産グループについて減損損失302百万円を計上
 - テストセンター事業（174百万円）、AI事業（117百万円）及びテスト運営・受託事業（10百万円）
 - 投資先について投資有価証券評価損161百万円を計上
 - 2021年8月に設置した特別調査委員会による調査関連費用として、特別調査費用引当金繰入額203百万円を計上

セグメント別の売上高・セグメント利益

(単位：百万円)

事業セグメント		21年9月期 1Q	22年9月期 1Q	前年同期比
テスト等ライセンス	売上高	337	332	△ 1.6 %
	セグメント損益	135	73	△ 46.0 %
教育プラットフォーム	売上高	533	592	+ 10.9 %
	セグメント損益	241	132	△ 45.3 %
テストセンター	売上高	619	693	+ 11.9 %
	セグメント損益	△187	91	—
AI	売上高	114	75	△ 33.8 %
	セグメント損益	△235	△145	—
テスト運営・受託	売上高	283	388	+ 36.7 %
	セグメント損益	△20	△61	—
全社費用		△330	△305	25百万円減少

(単位：百万円)



(単位：百万円)

事業セグメント	2020年9月期				2021年9月期				2022年9月期
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q
テスト等ライセンス事業	95	167	90	90	135	195	79	175	73
教育プラットフォーム事業	239	320	399	436	241	222	404	246	132
テストセンター事業	△28	47	△215	△143	△187	△427	△18	136	91
AI事業	△26	48	85	56	△235	△24	41	△122	△145
テスト運営・受託	△55	59	48	104	△20	108	61	△133	△61
全社費用	△292	△355	△225	△255	△330	△388	△298	△286	△305

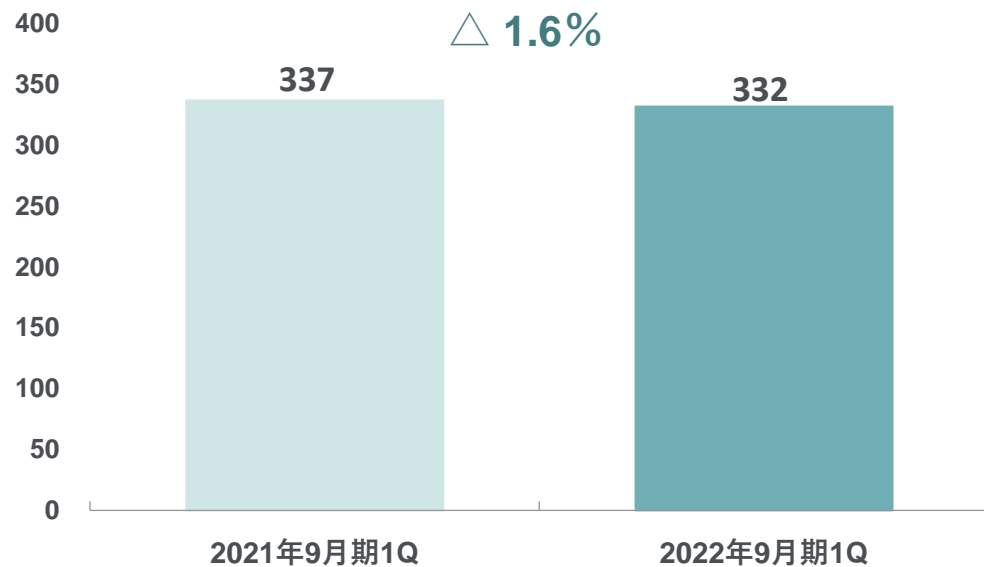
事業セグメント別 実績

- 英語スピーキングテストに伴うライセンス収入や、企業・学校向け英語能力判定テストの「CASEC」において、前年度の受注減少の影響が出ており、受験者数の減少の影響を受け売上が減少
- TEAP-CBTにおいて、関連資産の取得により、同テスト実施に関する固定費が増加し営業損失を計上
- 上記等の結果、**売上高は前年同期比 1.6%減**となる**332百万円**、**セグメント利益は同 46.0%減**となる**73百万円**となった

売上高・セグメント損益

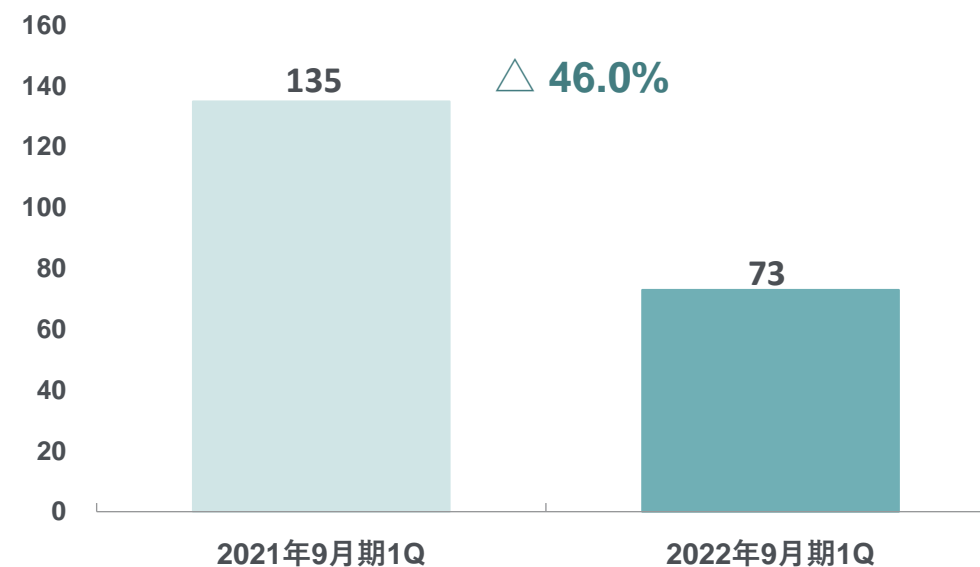
売上高

(単位：百万円)



セグメント損益

(単位：百万円)

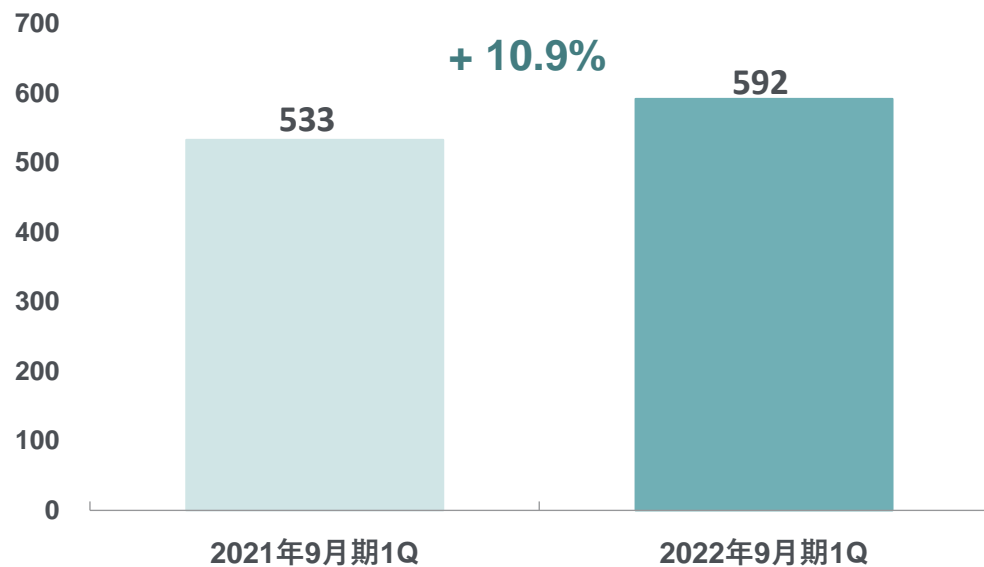


- 前年度に影響を受けた新型コロナウイルス感染症拡大の減速に伴うライセンス対象者の増加により、スタディギアのライセンス収入等が増加したことにより収益が拡大
- 一方で、利益率の高い辞書等のコンテンツ利用料が減少
- 上記等の結果、売上高は前年同期比 **10.9%増**となる**592百万円**、セグメント利益は同 **45.3%減**となる**132百万円**となった

売上高・セグメント損益

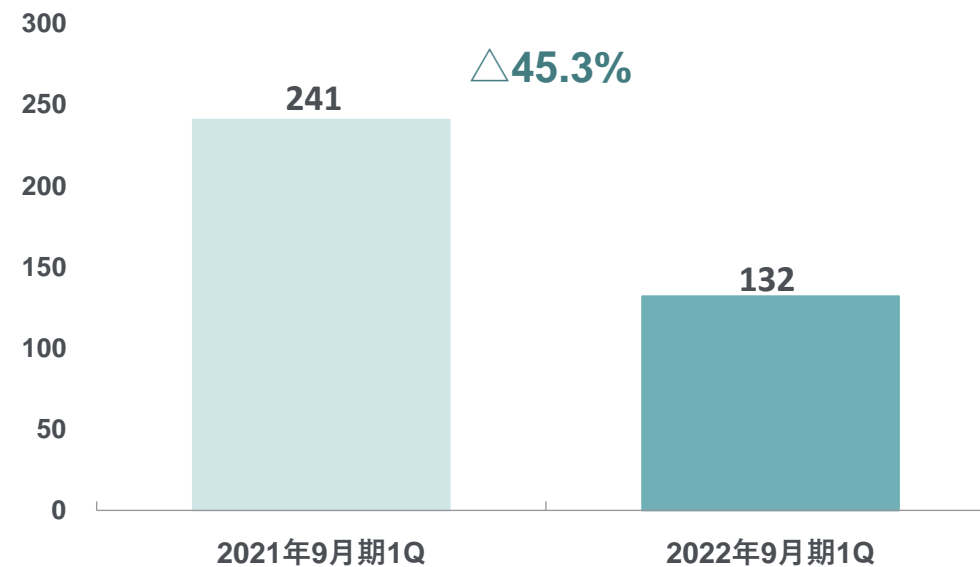
売上高

(単位：百万円)



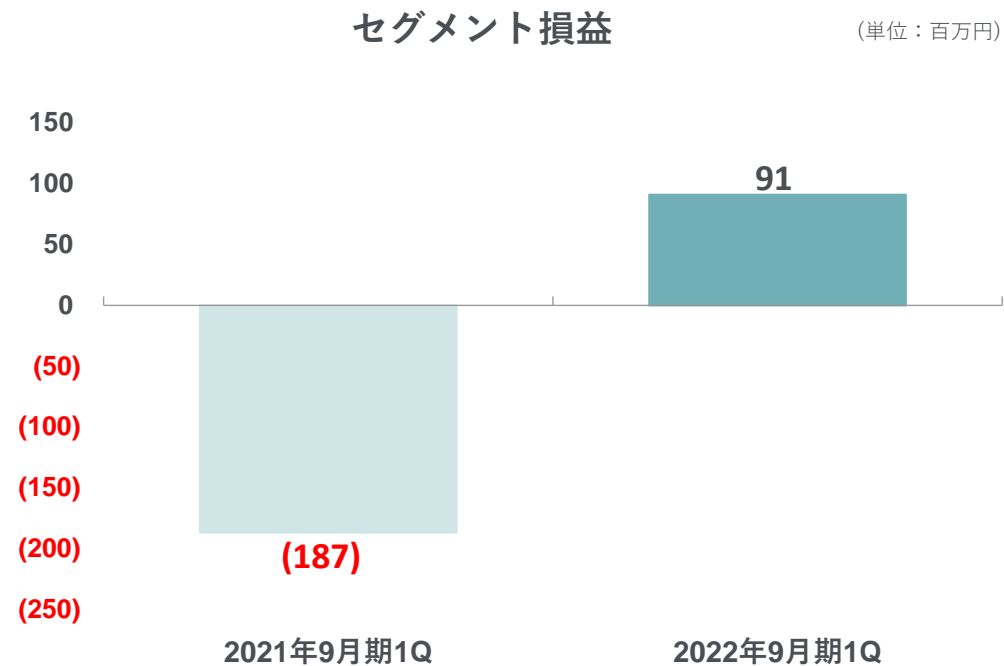
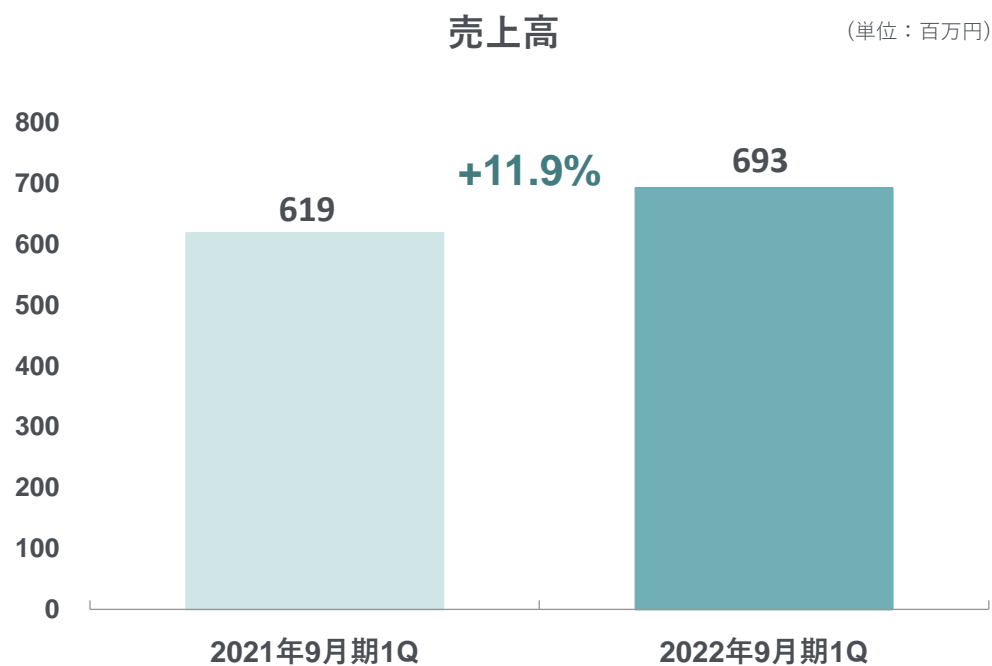
セグメント損益

(単位：百万円)



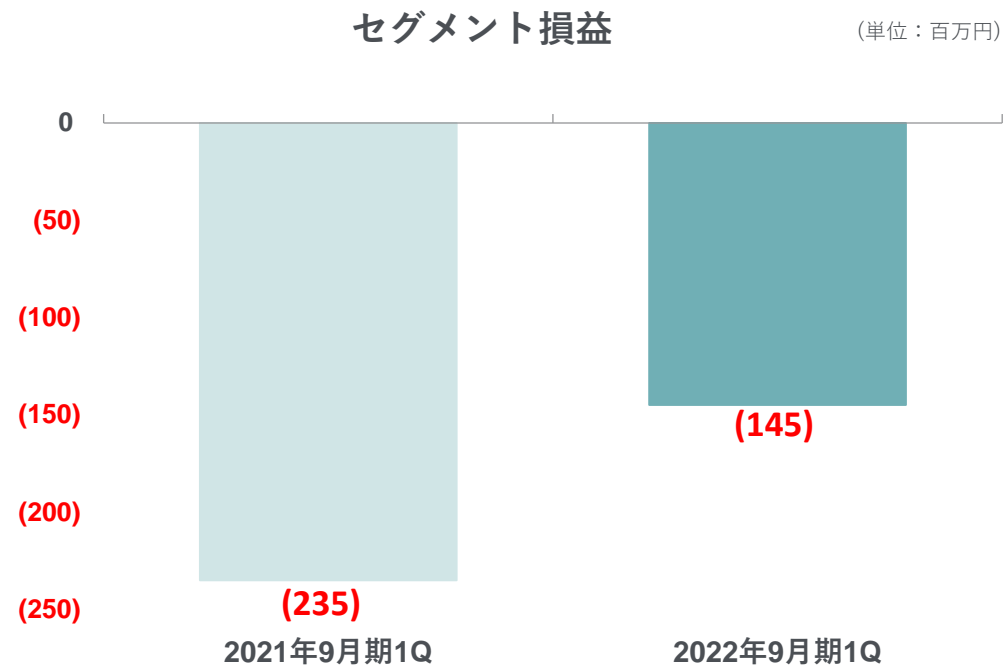
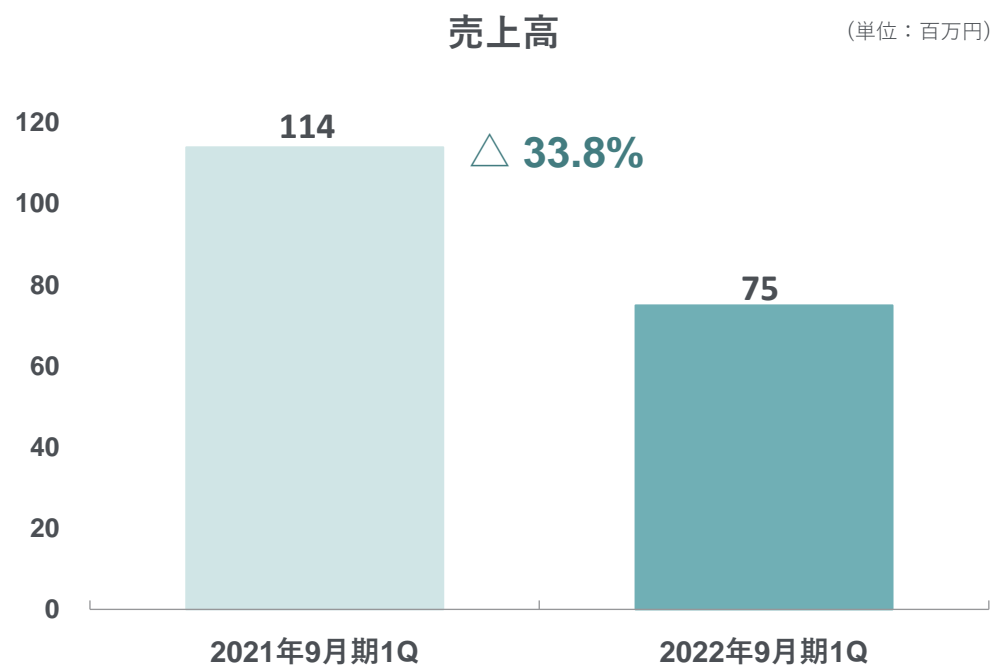
- テストセンター利用者数は今期1Qで約16万人（前年同期比40%増）となり、業績は順調に推移
- 上記等の結果、**売上高は前年同期比 11.9%増**となる**693百万円**、**セグメント利益は91百万円**（前年同期はセグメント損失187百万円）となった
- 今期は合計約72万人の受験者を見込む（前年比18%増）

売上高・セグメント損益



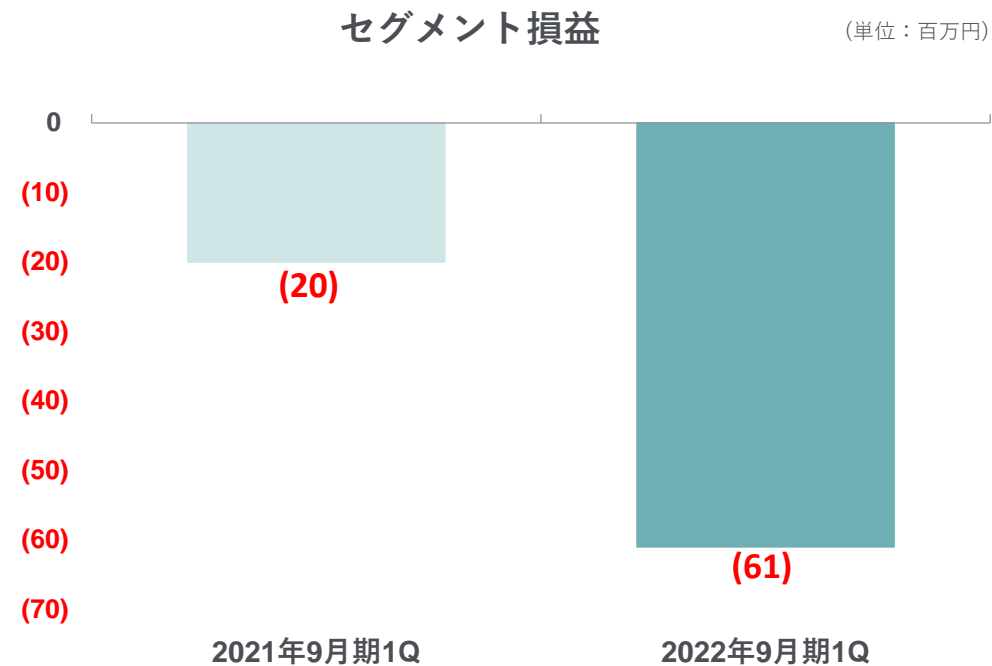
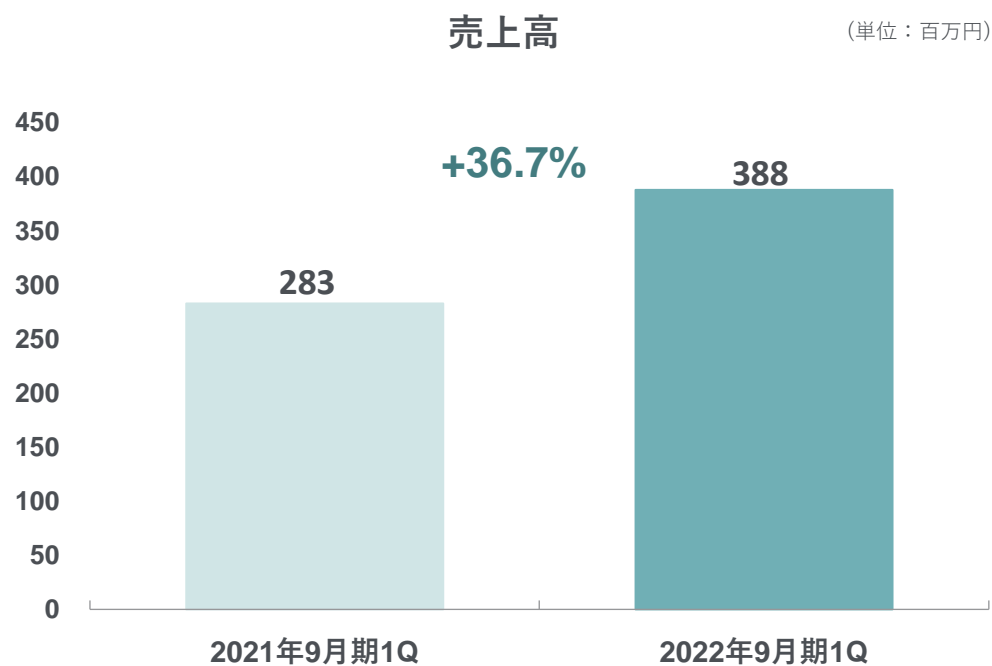
- 手書き文字認識「DEEP READ」ライセンス収入は安定して推移したものの、親密先とのPOC契約の減少等により売上が減少
- 開発費用が先行して発生したものの、前年同期比でセグメント損失幅は縮小。この他に特別損失としてソフトウェア資産について減損が117百万円発生
- 上記等の結果、**売上高は前年同期比 33.8%減**となる**75百万円**、**セグメント損失は145百万円**（前年同期はセグメント損失235万円）

売上高・セグメント損益



- 大阪府の令和3年度中学生チャレンジテストを受注したこと等により売上高が増加
- CBT関連案件を中心とする既存案件で採算性が悪化し、また、利益率の低い新規案件を受注
- **売上高**は前年同期比**36.7%増**となる**388百万円**、**セグメント損失**は**61百万円**（前年同期はセグメント損失20百万円）

売上高・セグメント損益



営業外損益

(単位：百万円)

	21年9月期 1Q	22年9月期 1Q	対前年増減額
営業外収益	198	47	△ 151
為替差益	—	24	+ 24
事業損失引当金 戻入額	189	—	△ 189
契約解約益	—	12	+ 12
その他	9	10	+ 1
営業外費用	166	76	+ 90
支払利息	10	11	△ 1
為替差損	21	—	+ 21
投資事業 組合管理費	33	37	△ 3
持分法による 投資損失	2	8	△ 5
市場変更費用	44	—	+ 44
その他	54	18	+ 35

- 営業外収益は、前期に計上したテストセンター事業における事業損失引当金戻入額が今期は発生しないこと等により減益
- 為替差損益は前年同期に21百万円の為替差損を計上したが、今期1Qは円安基調のため24百万円の為替差益となった

	2021年 9月末	2021年 12月末	(単位：百万円) 増減額
流動資産	14,832	13,229	△ 1,602
現預金	10,698	9,762	△ 935
その他	4,134	3,467	△ 667
固定資産	4,133	3,986	△ 147
ソフトウェア	2,265	2,282	+ 17
投資その他の資産	1,410	1,265	△ 145
その他	458	439	△ 19
繰延資産	6	5	△ 0
資産 合計	18,972	17,222	△ 1,750
流動負債	8,654	7,900	△ 754
有利子負債	3,938	3,970	+ 32
前受金	1,174	-	△ 1,174
契約負債	-	1,180	+ 1,180
その他	3,542	2,748	△ 793
固定負債	4,146	4,100	△ 46
有利子負債	4,023	3,983	△ 40
その他	123	117	△ 6
負債 計	12,801	12,000	△ 800
純資産 計	6,171	5,221	△ 949
負債純資産 合計	18,972	17,222	△ 1,750

- 流動資産は前年度末より約16億円減少。
- うち現預金が約9億円減少した主な要因
 - 経常損失による△ 2.4億円
 - ソフトウェア開発による△4.6億円
 - 特別調査費用支払△ 1.4億円
 - 法人税等支払△ 0.8億円
- 投資その他の資産の減少等が影響し、固定資産は1.4億円減少
- 前期末時点の前受金残高は**11.7億円**、今期1Qより前受金は契約負債に含めて表示



2022年9月期 通期見通し

2022年9月期通期予想

(単位：百万円)

	21年9月期実績	22年9月期予想
売上高	10,090	9,900
営業利益	△425	300
営業利益率	—	3.0%
経常利益	350	150
親会社株主に帰属する 当期純利益	△5,255	△980

通期予想の主な前提

- 売上高は、全国学力・学習状況調査事業において、前期は小学校事業と中学校事業を受託していたものの、今期は小学校事業のみ受託していること等により、減収の見込み
- 営業利益は、前期に計上したテストセンター事業に関連する事業損失引当金が発生しないこと、同じく前期に計上した研究開発費等が見込まれないこと等により、増益の見込み
- 経常利益は、営業外収益として、前期に計上したテストセンター事業における事業損失引当金戻入額が発生しないこと等により、減益の見込み
- 親会社株主に帰属する当期純利益は、固定資産の減損損失および特別調査関連費用が前期と比較して減少する予定であることから損失幅が縮小する見込み

成長戦略

(4月1日付「事業計画及び成長可能性に関する事項」からの抜粋)

高い能力測定技術と実施運営までのトータルソリューション提供
テスト・ラーニングの問題設計から学習者・受験者へのフィードバックまでの
全ての工程をICTと能力測定技術を駆使して実施

高い能力測定技術

- I. テスト理論・教科内容に関する専門的な知識・技能の蓄積と実績
- II. AIを活用したアダプティブエンジン
- III. AIを活用した文字認識技術・NLPを用いた自動採点

*NLP (Natural Language Processing) : 自然言語処理、人間が日常的に使っている自然言語をコンピュータに処理させる一連の技術

実施・運営のインフラと実績

- IV. ICTと能力測定技術を活用した長年の実績
- V. 国・地方公共団体等の大規模学力調査の実績
- VI. テストセンター運営実績
- VII. 英検・漢検・数検の公式ラーニングサービスの提供実績

I. テスト理論・教科内容に関する専門的な知識・技能の蓄積と実績

高い品質と専門性をベースにICTの特性を活かしてより高品質で均一な精度の能力測定を実現

● 高い品質と専門性

- IRTを活用した問題作成・分析体制が社内で構築されており、TOEFL®などのハイスイクスな資格試験と同等の高い測定精度を保持（例：CASEC、埼玉県学力調査、TEAP CBTなど）
 - IRTとは従来の素点方式や偏差値方式よりも精度高く能力を測定可能とした統計理論。非常に高度な統計処理が求められるため日本の教育現場ではまだ使用例が少ないが、海外ではより正しい測定方法として、TOEFL®をはじめ広く採用されている
- TEAP CBTは大学入試において英語外部検定試験としても認められた品質

● 革新的な問題開発の実績

- 従来型の紙のテストでは出題が不可能だったアダプティブ（個人適応型）や英語4技能に対応した問題をICTならではの技術を活かして開発
 （例：CASEC、CASEC Speaking、TEAP CBT）



II. アダプティブエンジン

独自開発したAIベースの高度なレコメンドエンジンを活用し
学習サービスにおける個別最適化、効率化を実現

- 従来のルールベースのエンジンだけではなく
多様なDeep Learningの手法や推薦の特性を活用
AIベースの汎用レコメンドエンジン『CAERA』を
サービスに適応

- レコメンドエンジンの活用効果
Deep Learningのモデルに基づく個々の能力に適応したオン
ライン学習サービスを提供。これにより、効率的かつ
効果的な学習・測定を実現
(例：スタディギア for EIKEN)

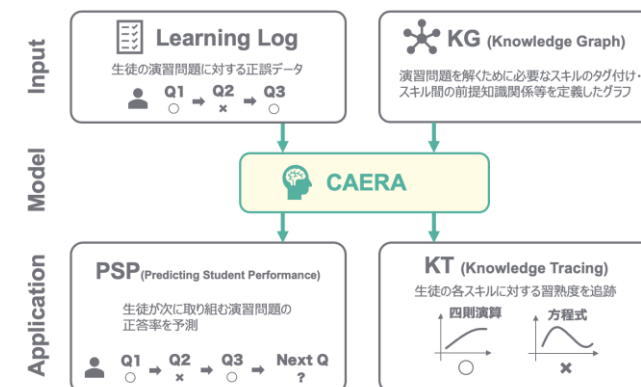
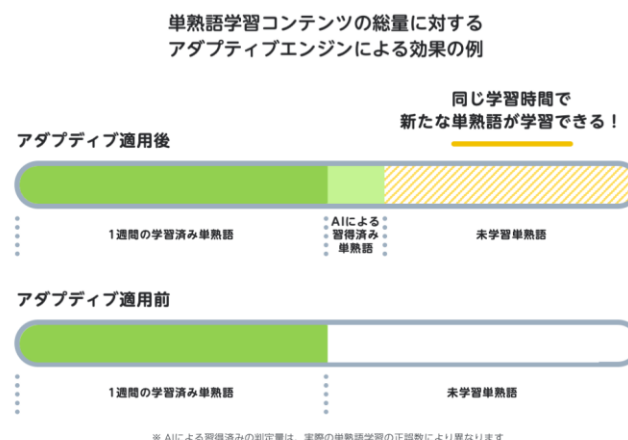
手法

1. 内容ベースフィルタリング
2. 協調フィルタリング
3. 時系列予測
4. クラスタリング



推薦の特性

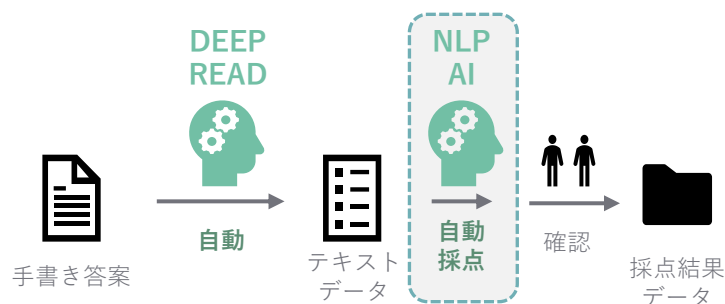
- 新規性/多様性/セレンディピティ
- 時系列(順序関係)の考慮
- Cold Start問題への対処
- コンテキストの考慮
- 推薦理由の提示/推薦の透明性



III. 文字認識技術・NLPを用いた自動採点

独自開発したAIエンジンを組み合わせ自動採点を実用化

- 蓄積された解答データや採点結果データを観点別に分析し、Deep Learningを駆使した自然言語処理技術により高い精度での自動採点を実現
- 複数のAIエンジン(文字認識技術、自然言語処理技術)や複数の要素技術(形態素解析、構文解析、意味解析、文脈解析…等)を組み合わせた高度なアルゴリズム

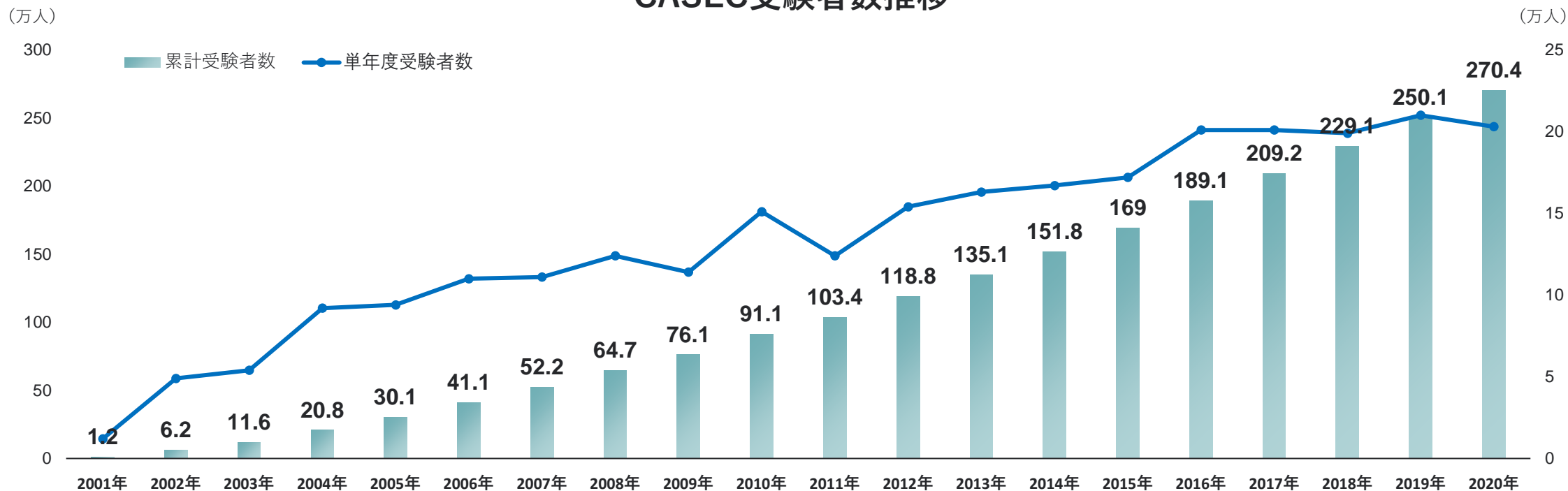


The screenshot shows the 'Study Gear' (スタディギア) interface for English exams. It features a green robot character and text in Japanese: 'ライティング実践編と英検二次対策が自動採点に対応しました! AIがあなたの解答を自動で採点します!' (Writing practice and Eiken 2nd round preparation are now supported by automatic grading! AI will automatically grade your answers!). The interface also displays a 'Question' section with the text 'What is your favorite city?' and a '解答結果' (Answer Result) section showing a sample answer and a progress indicator for 'Level 4'.

IV. ICTとテスト技術力を活用した長年の実績

- 文部科学省が学力調査や共通テストへの導入を検討しているIRTを活用したCBTにおいて20年以上の実績
 - CASECは2001年10月の本格展開後、累計受験者数は270万人以上（2020年3月末時点）
 - TEAPは累計約290校、うちTEAP CBTは約100校で実施（2020年5月末時点）

CASEC受験者数推移



V. 国・地方公共団体等の学力調査の豊富な実績①

- 当社グループの教育測定研究所は、国や地方自治体が実施する大規模な学力調査事業を長年にわたり受注
- テストの設計から問題作成、実施、採点、帳票の返却までを一貫して実施

文部科学省「全国学力・学習状況調査」委託先機関

	小学校事業	中学校事業
2018年度	ラーンズ	ベネッセコーポレーション
2019年度	教育測定研究所	内田洋行
2020年度 (※)	教育測定研究所	内田洋行
2021年度	教育測定研究所	Z会（再委託先： 教育測定研究所 ）
2022年度	教育測定研究所	内田洋行

(※) 2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響等により調査の実施は見送り

出典：「全国的な学力調査（全国学力・学習状況調査等）」文部科学省HP

V. 国・地方公共団体等の学力調査の豊富な実績②

最先端の学力調査として世界的に注目される、埼玉県学力調査を例年受託・実施

埼玉県学力・学習状況調査とは

- 欧米で広く使用されるテスト理論であるIRTを用いることで、児童一人ひとりの「学力の伸び」を図る画期的な調査
- 従来の試験方法では、全体の平均に対する偏差値で評価するため、問題の難易度等により影響を受け、個々の「伸び率」を正確に図ることができない。IRTを活用した調査では、偏差値や平均点という「ものさし」ではなく、一人ひとりの学力の伸びを把握することが可能
- IRTを活用した学力測定には膨大なデータと継続的な追跡調査が必要であり、現在埼玉県では小学校4年生から中学校3年生まで約30万人のデータを継続的に収集・分析することで、精度の高い学力測定を実現

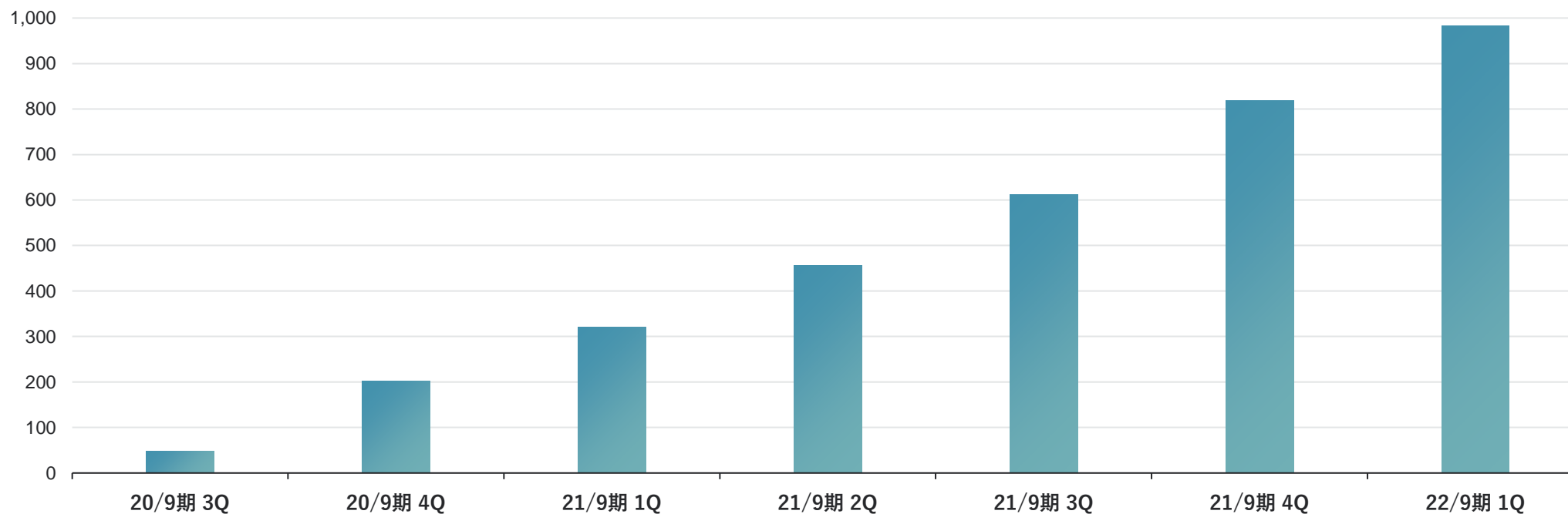


VI. テストセンター運営実績

公平・公正な環境下でCBTテストの実施を可能とするテストセンターを全国に設置
運用を開始した2020年6月から2021年12月末までに累計98.3万人が直営テストセンターを利用

直営テストセンター利用者数推移

(単位：千人)



VII. 英検・漢検・数検の公式ラーニングサービスの提供・運用実績

- 中高生を中心とした約630万人の顧客基盤をベースにした総合学習支援のプラットフォーム月額500円（税込）のプライム会員向けにサービスを提供
- 学習とテストをセットにすることにより、「学習→テスト→採点→結果の活用」という一連のサイクルを確立
- 検定公式ラーニングサービスは、幅広いレベルに対応した品質の高いコンテンツを搭載検定試験を意識した問題形式での実践的な学習に対応
- 2021年7月に「Z会 × スタギア 大学入学共通テスト形式 到達度確認テスト(CBT)」、2021年8月に漢検公式ラーニングサービス「スタギア漢検（10級～2級対応）」、2021年11月に数検公式ラーニングサービス「スタギア数検（中学1年～3年対応）」の提供を開始

総合学習支援の窓口プラットフォーム「スタギア」



検定受験者を低年齢から一気通貫でサポートするサービスの提供

検定市場のポテンシャル



	2018年	2019年	2020年
実用英語技能検定 ^{※1}	3,855,068	3,924,841	3,678,161
日本漢字能力検定 ^{※2}	1,984,690	1,903,182	1,413,243
実用数学技能検定 ^{※3}	376,000	358,000	303,000

※1：公益財団法人 日本英語検定協会、「英検受験の状況」. <https://www.eiken.or.jp/eiken/merit/situation/>. (参照 2022/3/10)
 ※2：公益財団法人 日本漢字能力検定協会、「年間志願者数および合格者数の推移」. <https://www.kanken.or.jp/kanken/investigation/transition.html>. (参照 2022/3/10)
 ※3：公益財団法人 日本数学検定協会、「検定に関する各種データ」. <https://www.su-gaku.net/suken/examination/data/>. (参照 2022/3/10)

持続的な競争力強化

1

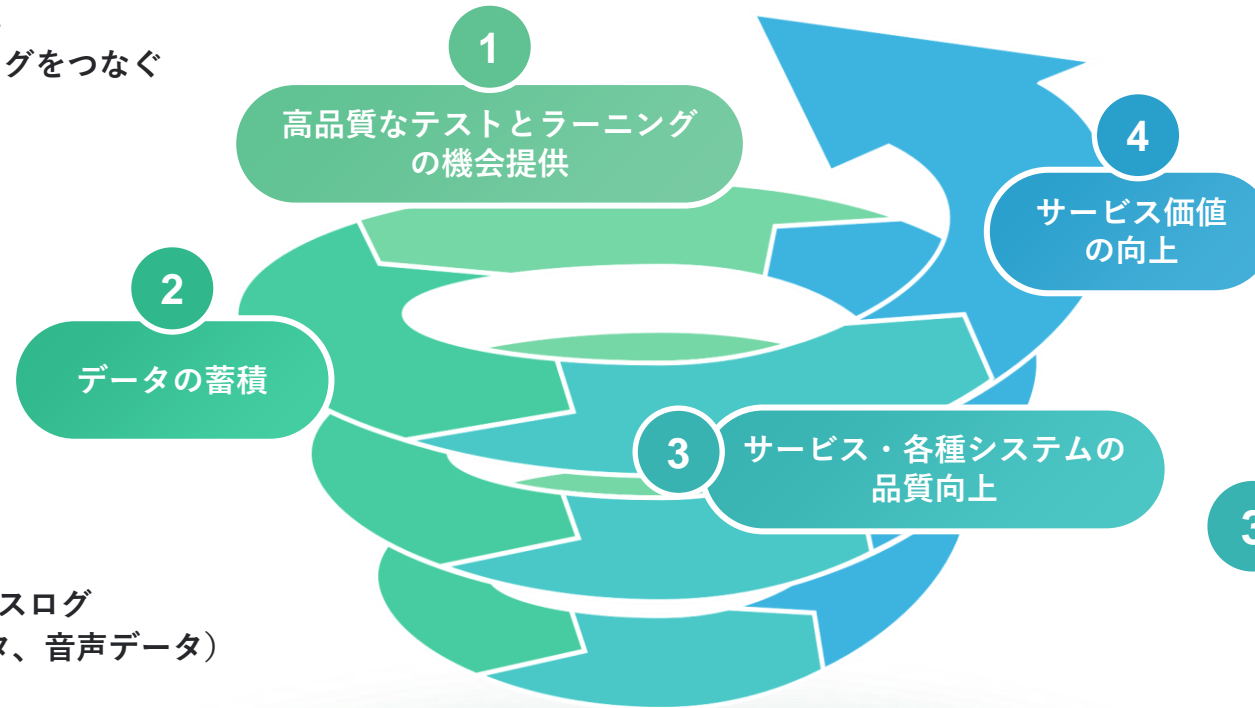
高品質なテストとラーニング 機会の提供

測定技術の研究開発を行い
質の高いテストとラーニングをつなぐ
トータルサービスを提供

4

サービス価値の向上

- ・ラーニング中の即時結果閲覧
- ・テストの採点精度の更なる向上
- ・テストの結果閲覧期間の短縮



2

データの蓄積

- ・テスト/学習パフォーマンスログ
- ・解答データ（手書きデータ、音声データ）
- ・申し込みログ
- ・問題データ
- ・分析結果データ

3

サービス・各種システムの 品質向上

質の良いデータの分析結果から
得られるサービス・各種システムの
品質向上

- ・自動採点システム
- ・アダプティブ・システム
- ・文字認識システム

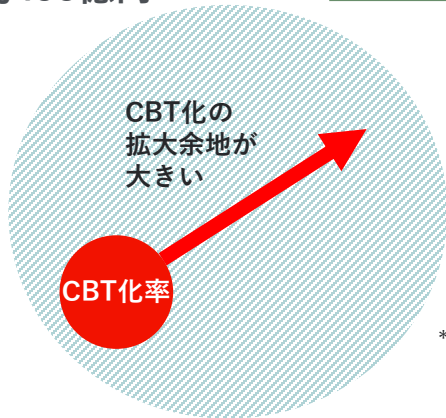
土台を支える多数のテスト実施実績とインフラ

- ・長年の大規模学力調査受託実績
- ・多様なCBT実施実績
- ・累計98万人超が利用するテストセンター実施実績

各省庁の施策の後押しもあり2024年度に向けてCBT化が加速
英検のみならず、様々なCBTテストにも活用し、収益機会の拡大を計画

<p>生きる力、学びのその先へ（抜粋） （新しい学習指導要領 文部科学省）</p>	<p>GIGAスクール構想の実現パッケージ（抜粋） （令和の時代のスタンダードな学校へ 総務省）</p>
<p>プログラミング学習・英語4技能化</p> <p><u>新たに取り組むこと、これからも重視すること</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ プログラミング教育 コンピュータがプログラムによって動き、社会で活用されていることを体験し、学習します。 ➢ 外国語教育 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を総合的に育みます。 ➢ 道徳教育 自分ごととして「考え、議論する」授業などを通じて道徳性を育みます。 ➢ 言語能力の育成 国語を要としてすべての強化等で子供たちの言葉の力を育みます。 etc 	<p>教育現場のICT</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>環境整備の標準仕様例示と調達改革</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 学校ICT環境の整備調達をより容易に </div> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>クラウド活用前提のセキュリティガイドライン公表</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ クラウド活用により使いやすい環境へ </div> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px;"> <p>学校ICT利活用ノウハウ集公表</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 全ての教職員がすぐに使えるように </div> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>関係省庁の施策との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ ローカル5Gや教育コンテンツも活用して未来の学びを実現 </div> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>民間企業等からの支援協力募集</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 民間等の外部支援により導入・利活用加速 </div>

他社既存検定含めた検定市場
約495億円*



CBT実施環境整備を通じて、日本におけるCBT化へ寄与

第1弾

- ▶ 英検協会の既存テストのCBT化促進

第2弾

- ▶ 自社テストCASECファミリーの公開会場

第3弾

- ▶ 他社既存検定のCBT化
 - ・ 直営テストセンターで数十団体受注済み

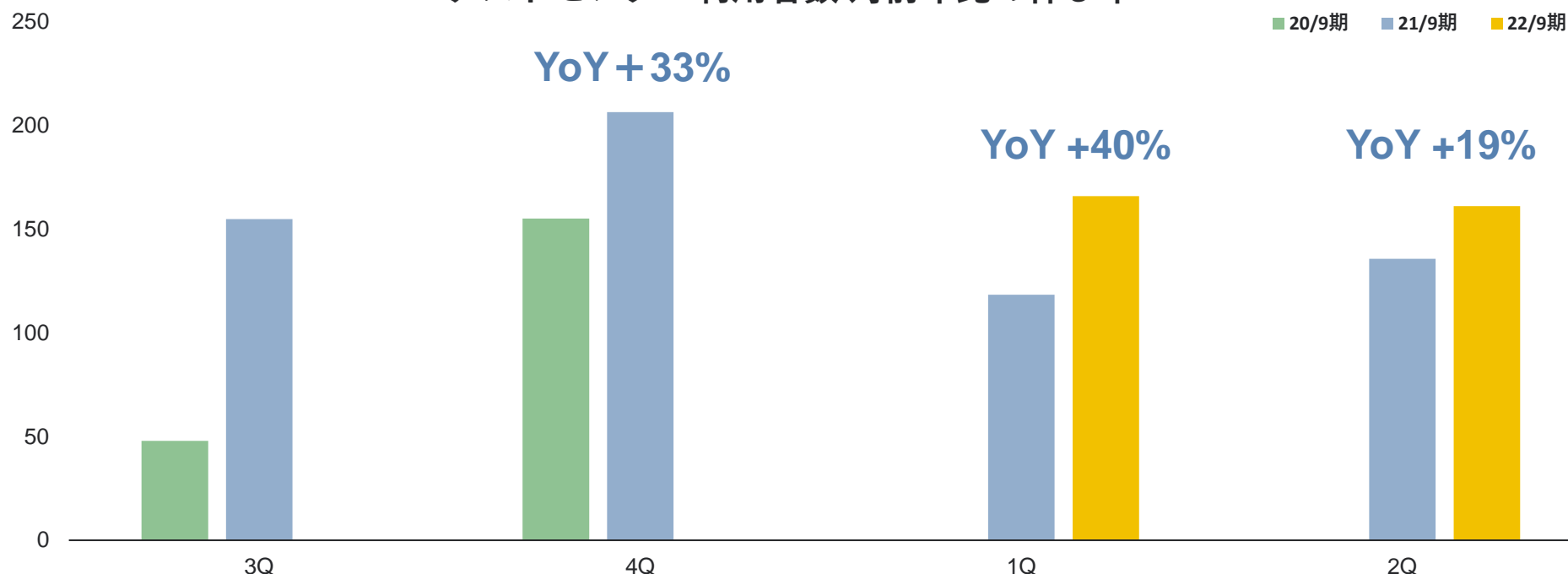
*2018年版 教育産業白書
矢野経済研究所

テストセンターでのCBT受験者数が増加

- 大学入試での外部検定試験活用増加等の市場環境を背景に、当社の「高い能力測定技術」と「インフラと運営の実績」を活かし、テストセンターにおいて公平・公正な環境で、常時CBT受験できる機会を提供
- 前年同期比で33%~40%伸長。テスト市場でのCBT化が加速

(単位：千人)

テストセンター利用者数 対前年比の伸び率



※2020年6月より運営開始しており、20/9期3Qの数値は一ヶ月のみ ※4Qは季節要因により需要増の傾向

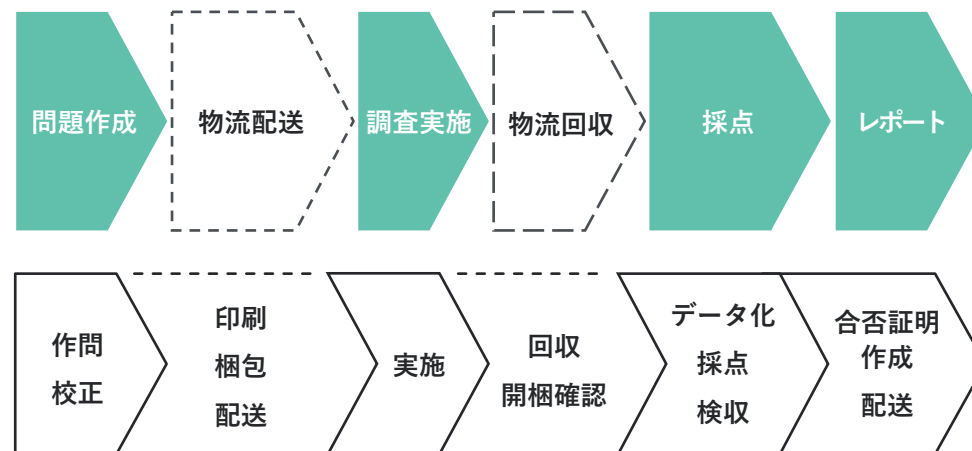
「CASEC」「TEAP CBT」の開発・運用実績を土台に英検のCBT化により培った基盤を活用
単なるシステム・テストセンターの提供にとどまらず、問題作成～試験実施～採点までの
トータルサポートでCBT化を推進

現状のPBT*プロセス



業務負荷の低減

当社の考えるCBTプロセス



- ポイント**
- IRTを用いた作問やテストシステム技術による制作工数の削減
 - AI採点によるリードタイムの短縮
 - テストセンターでの運営インフラを整備

- 課題**
- 問題冊子、解答用紙の制作工数負荷
 - 採点におけるリードタイムとコスト
 - 災害による実施、日程調整負荷

*PBT (Paper Based Testing) : 従来型の紙で実施するテスト

検定の特性に応じたCBTシステムを提供

a. インターネット型

インターネット接続が前提となるCBT（昨今主流になりつつあるタイプ）

ネットワーク接続に関する障害が発生した際に、**実行の継続が困難**

ネットワーク上でテストが完遂するため、物流コストが安く済む傾向がある

b. ローカル型

ネットワーク接続を前提としないCBT（試験会場での実施を前提とする旧来型）

ネットワークと遮断されているため**高セキュリティな環境での実施が可能**

高セキュリティである反面、従来の紙の試験を単にコンピュータに置き換えたものに近いためComputerの特性が活かしきれない



USBの中にOS、アプリを搭載

c. ハイブリッド型

インターネット型とローカル型の強みを組み合わせたCBT

受験者の解答や実施ログなどをネットワークを介してサーバに送信することで

試験素材を事前にローカルにダウンロードしておくことで、

ネットワーク障害が起きても試験の継続が可能



- ◆ログイン後、受験説明から受験完了まで自動で進む仕組みを提供します。
- ◆全国 280 会場のテストセンターで本システムに精通した**実施サポート員**を配置し、実施中監督者（先生）は、**通常の教室監督と同じ様に教室監督を行うのみ**となります。

生徒自身で実施が行えるための丁寧な受験方法の説明を行います。

出題エリアを大きくとり、スクロールなどの操作は不要な録音画面を提供します。

説明、設題に合わせて生徒はマイクに向かって解答するだけで受験が完了します。

スピーキング試験が完了しました。先生の指示に従ってください。画面は自動で切り替わります。

音量に合わせてゲージも動き、視覚的にも録音されていることを確認できます。

- ◆ヘッドセットについては、**単一指向性のヘッドセット**を採用し、実施に必要なヘッドセットを学校に配布します。
- ◆衛生面も考慮し、消毒用アルコールシートと共に配布します。
- ◆再委託機関にて、調査実施中に当該校の調査対象人数の音源が録音されているか確認できるシステムを構築します。受験予定に合わせて学校ごとの音声解答数を確認し、万が一解答音声に不備があった場合は、当日中に当該校通知、確認を行います。



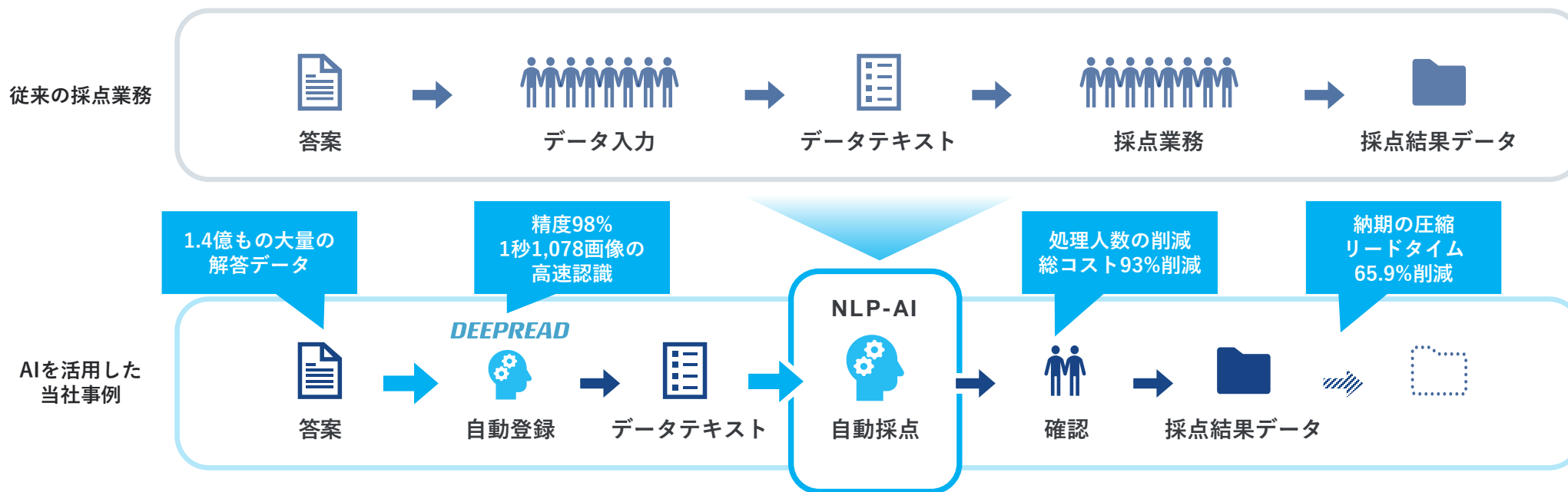
	タイプ	完全性	可用性	機密性	運用費	利便性
a	インターネット型	△	△	△	◎	◎
b	ローカル型	○	○	◎	△	×
c	ハイブリッド型	○	○	○	○	○

自動採点システムとしてNLPを活用し、採点の効率化に寄与 今後は教育業界だけでなく他業界への展開も推進

*NLP (Natural Language Processing) : 自然言語処理、人間が日常的に使っている自然言語をコンピュータに処理させる一連の技術

教育業界の採点業務の効率化

大規模採点業務において文字認識技術による答案のデータ化とNLPにより、コスト・納期を大幅短縮



教育業界で培ったAI技術の活用事例を他業界に横展開 紙の書類の扱が多い金融・医療業界を皮切りに拡大中

